

「なんだ？」

フランクが叫ぶ。全員が飛び起きてあたりを見回した。

「待って。今調べるから」

サラはそう言うと、壁のパネルに駆け寄る。

「まずいわ。空気漏れみたい。酸素の減り方が予想よりだいぶ速くなってる」

「なんだって！ いったいどこから漏れてる。自動修復機能は働いていないのか？」

フランクが叫ぶ。こうした気密区画は、外壁が多重化されていて、どこから空気漏れが発生すると、自動的に壁の間に充填剤を入れて、漏れている箇所を塞ぐようなくみになっている。

「どうやら、環境調整ユニットの内部でリークしてるみたい。自動修復がきかない場所よ」

「あと、どれくらい持つ？」

「ちよつと待って。今の減少率だと・・・持って2時間くらいだわ」

「2時間しかないのか。それじゃ、すぐに何か手を打たないと間に合わないな」

「どうするの？ 外に出て修理する？」

「いや、このタイプの避難所の環境調整ユニットはパッケージ型だから、蓋を開けて修理というわけにはいかないだろう」

ダイブが横から口をはさむ。

「じゃ、どうするの？」

と美空。

「誰かが助けを呼びに行くしかないか」

と、フランク。

「でも、非常用エアシールドは、もう使えないぞ。みんな、ほぼ限界まで使ってしまったからな」

ダイブが言う。

「ああ、でも、避難所なら、ストックがあるんじゃないか？」

「そうね。探してみようよ」

美空はそう言うと言いつつ壁の収納庫を開けて中をのぞき込む。

「あった……。だけど2個しかないわよ。やっぱり、ここはメンテナンス中の待避所みたいね」

「それじゃ、二人で行くか？」

とダイブ。

「待てよ。非常用エアシールドは一個で10分しか持たないんだ。10分じゃ次の待避所までぎりぎりだぞ。途中、何かあったらアウトになる。一人が2個持って行った方がいい」

フランクが言う。

「でも、それじゃ、もし何かあったときのサポートがなくなるよね」

アンリが脇から割り込む。

「確かにそうだが、10分しかないんじゃないや助けを呼べる可能性が低くなる。結果的に全滅するリスクを考えると、やむを得ないんじゃないか？　ただ……」

「誰かにそれをやれ、とは言えないわね」

とサラ。

「そうだ。まあ、言い出しつぺの俺が行けばそれですむんだがな」

「ちょっと待て。それなら俺が行く。この先がどうなってるかはわからんだろう。力仕事がいるかもしれないからな。体力勝負を考えればフランクよりは俺の方が適役だと思うぞ」

フランクの肩を叩きながらデイブが言う。

「それは、確かにそうだが・・・」

「まあ、任せておけ。なんとか助けを呼んでくるさ」

デイブはそう言うと、支度を始める。

「気をつけるよ。ダメそうなら無理せずに戻ってこい。ここは少なくとも2時間は空気があ
るんだからな」

「わかった。そうするよ」

デイブはそう言いながらエアロックに向かう。しかし、デイブの性格は皆わかっている。限界になるまで戻ろうなんて考えないだろう。

「デイブ、念のためにコミュニケータの非常用ビーコンはオンにしておいてね」

サラが声をかける。最悪・・・なんてケースはあまり考えたくはないが、ビーコンがあれば、動けなくなっても誰かが見つけてくれる可能性がある。

「わかった。じゃ、行ってくる」

エアロックのドアが閉まってデイブが外に出て行く。待避所から離れてしまうと、直接の通信はできない。あとは待つしかないのだが・・・。

「大丈夫かな、デイブ」

アンリが心配そうに言う。

「わからん。でも、あいつの性格だ。無茶なことをする可能性は十分あるな」

「それは僕も心配だ。タイムリミットは20分。行くか戻るかの決断は10分でつけないといけないよね。それを過ぎたら、もう進むしか無くなるから」

「ねえ、何かバックアップする方法はないの？」

美空がフランクに言う。

「バックアップか。しかし、今手元にあるエアシールドはどれも、あと1、2分しか持たないから、外に出るのは難しいな」

「1、2分あれば、通信くらいは出来るんじゃない？」

と、サラ。

「そうか、残りの空気を使って、何度か通信はできそうだな。やってみよう。10分経過時点で連絡して、ダメそうなら戻らせる」

フランクは全員のエアシールドを集めると空気の残量をチェックしはじめた。

「使えそうなのは3個だけだな。あとはもうほとんど残量がない。安全を考えれば一回。無理しても2回が限度だ」

「それなら、ダイブが無茶しないように、状況を確認するくらいは出来そうね」

「そうだな。やってみよう」

ダイブが外に出てから既に7分ほど経過している。フランクはエアシールドを持つと、エアロックに向かった。

「気をつけてよね。ミイラ取りがミイラにならないように」

美空が言う。

「わかってるよ。とりあえず、うまく連絡が取れることを祈ろう」

フランクはそう言うと、エアロックのドアを閉めた。待避所からあまり離れなければ、壁越しでもなんとか通信はできる。フランクのコミュニケーターを全員で共有してダイブと話すことも可能だ。

「デイブ、聞こえるか？ フランクだ」

表に出たフランクがデイブに呼びかける。少し間があつて、応答が帰ってきた。少し息が荒れた感じの声だ。

「聞こえてる。よく通信できたな」

「ああ、エアシールドに残った空気を使って表に出ている。出られるのはこれ一回限りだろう。どうだ、そっちの状況は？」

「順調だよ。少し道は荒れてるが、もう半分以上進んでいる。洞窟の分岐点まであと200メートルってとこだな」

「大丈夫か。そろそろ10分だ。引き返すなら今だぞ」

「問題ない。この分なら余裕で次の待避所まで行けそうだ」

「そうか、それならいいが、気をつける。ここから先は何かあっても引き返せないぞ」

「わかっている。待避所に着いたら助けを呼んで、それから何か連絡手段を考えるよ」

「頼んだぞ。・・・そうだ。俺のコミュニケータを中継用に外に置いておく。着いたら呼んでくれ」

「わかった。もうしばらく待っていてくれ」

そろそろエアシールドの空気が少なくなってきたので、フランクは脇のベンチにコミュニケータを置くと、急いで待避所に戻った。

「なんとかかなりそうだ」

「そうね。まあ、デイブが正直に状況を伝えてたとして・・・だけど」

「そこまで疑ったらきりがない。あいつを信じるしかないだろう」

「確かに。とりあえず連絡を待つしかないわね。フランクのコミュニケータを経由して通信はできるから」

それからの数分は異常に長く感じられた。重苦しい空気の中で、全員が黙って連絡を待っていた。

「遅いわね。さっきの話だと、もう着いていてもいい頃じゃない？」

最初に口を開いたのは美空だった。

「たしかに。そろそろダイブが出かけてから20分だ。あいつは余裕だと言ってたから、もう連絡が無いとおかしい」

「サラ、呼んでみたら？」

「そうするわ。ダイブ、聞こえる？応答して」

サラが呼びかけるが応答がない。

「おかしいわ、受信反応がないのよ。コミュニケータが切れてるか、電波が届いていないみたいだわ。ビーコンも受信できない」

「まさか、何かあったんじゃない？」

アンリが心配そうに言う。

「連絡を忘れて待避所に入っちゃったとか？あいつ結構慌てものだし」

美空もそう言いつつ心配顔だ。サラが繰り返し何度も呼ぶのだが、まったく応答がない。一同は重苦しい雰囲気包まれる。

「そうだな。まだ何かあったと決まったわけじゃない。もうしばらく待ってみよう」

実際、何かあったとしても、自分たちに何も出来ないことは、フランクにもよくわかってい。だが、そのことがまた逆に不安を大きくするのだ。またしばらく一同は沈黙する。しかし、いつまでたっても連絡は無く、時間だけがどんどん過ぎていく。

「そろそろ1時間になるわ。いくらなんでも遅すぎない？」

沈黙に耐えられなくなったのか、美空が口を開いた。

「そうね。ダイブが無事かどうかは別にして、救援はあまり期待できそうにないわね。どうする？フランク」

サラも言う。

「どうする、と言われてもな。俺たちはここから動けないわけだし、とりあえず、酸素の消

費をできるだけ抑えて待つしかないだろうな。空気漏れだけでもなんとか出来ればいいんだが・・・」

「でも、環境調整ユニットの中じゃ、簡単には手を出せないわよ」

「配管を通して充填剤を流し込めないかな」

「それは危険ね。漏れている箇所がフィルターの先だと、フィルターを詰まらせてユニットそのものを壊す可能性があるわ」

「ちよつといいいかな」

それまで黙っていた健太が口を開く。

「フィルターや循環系のどっち側で漏れているかは、ユニットを一度止めてみればわかるんじゃないかな。吸い込み側と吐き出し側、どちらの配管から空気が漏れていくかで、ある程度判断ができるかもしれない。それがわかれば、ユニットを止めた状態で充填剤をミスト状にして、空気が出て行く側の配管に入れてやれば、漏れている箇所まで届くかもしれない。少量ずつ流せば周囲への悪影響も減らせるんじゃないかな。充填剤は真空に触れないと固まらないから」

「それ、いいアイデアですね。僕も賛成です」

アンリがすぐさま同意する。

「でも、そもそも、充填剤なんてあるの？」

と美空。

「普通なら予備のボンベがどこかに置いてあるはずだけど、最悪、取り付けてあるやつを外すしかないかもしれないな」

とフランク。

「たしか、さつき・・・」

美空が保管庫をのぞき込む。

「あった。これでしょ」

と小さなポンベを取り出す。

「よかった。それはあつたか。じゃ、早速……。サラ、環境調整ユニットを一度止めよう」
「わかったわ。やってみる」

サラが壁の管理コンソールに向かう。

「吸気口はここだな。でも、僅かな空気の流れをどうやって見るんだ？」

「それは僕に任せてくれ。たぶん、配管部にエアフローセンサーがあるはずだから、それを
使おう」

健太がサラの脇から管理コンソールをのぞき込む。

「そう、それだね。ユニットを止めた状態で空気の流れがどう変わるかを見るといいよ」

「じゃ、止めるわよ」

「了解。たのむ」

サラがコンソールを操作すると、空気の流れが止まる。ちよつと空気がよどんだ感じだ。

「どうだ？」

フランクが聞く。

「安定するまでちよつと待ってね……。うん、吸気側が負圧になってるから、フィルターの
手前だね」

「よし、それじゃ吸気口から充填剤を流そう。美空、たのむ」

「了解。じゃ、流すよ」

美空が吸気口の前でポンベのバルブを少し開く。シューと音がして吹き出した霧が吸気口に
吸い込まれていく。

「ゆっくり流しながら様子を見よう。変化が出たら教えてくれ」

「いまのところ変化なしね」

サラと健太がコンソールをのぞき込む。

「美空、一度止めて様子を見よう。流しすぎると後が面倒だ」

「わかったわ」

美空はボンベのバルブを閉じる。しばしの沈黙。またしてもちよつと重苦しい時間。空気が実際によどんでいる分、息苦しさが増す。

「まだ変化なしね・・・あ、ちよつと待って」

サラがコンソールをのぞき込んで言う。

「圧力が上がってきてる。効いてるみたいね」

「よし、いいぞ。美空、もう少し流してみよう」

「了解」

美空がまたバルブを少し開いて充填剤を流し込む。

「うん、だんだん上がってきたわ。もう少しで正常になりそうよ」

「よかった。これで、多少は時間が稼げそうだ。充填剤が落ち着くのを待って、ゆっくりと

循環を戻そう」

「了解。この分なら、あと2、3時間はなんとかなりそうだけど・・・」

「でも、あんまり余裕もないね。これからどうしよう?」

「それが問題だけだな。外に置いてあるコミュニケーターの非常用ビーコンは作動させてある。うまく見つけてもらえればいいんだが」

「デイブは・・・大丈夫・・・だよ。連絡さえ取れていれば、見つけてもらえるから」

デイブのことは気になる。しかし、自分たちも土壇場にいるわけで、まずはそちらをなんとかしないとイケない。とはいえ、ここから身動きが取れない状況では、出来ることはほとんどないのだが。

「いずれにせよ、俺たちは、酸素の消費をできるだけ抑えて、少しでもこの空気を長持ちさせるしかないさそうだ」

「そうね。覚悟を決めて、助けを待つかないか」

「待ってよ、このまま何もしないでここにいるつもりなの？」

美空が、少し声を荒げた。

「そりゃ、どうにかできるならしたいさ。でも、何が他にできる？」

「そりゃ、そうだけど……。もし助けが……。来なかったら」

「それは、あんまり考えない方がいいわね。てか、考えたくないよね」

「たしかに。実際、何をしても余計に酸素を消費して自分の首を絞めることになりそうだけど……。僕も、美空と同じでちよつと悔しいかな」

「そりゃ悔しいのは俺も同じだ。でも、待つしか無いんだったら、ダイブを信じて待たないか。少なくとも、あいつは命がけでどうにかしようとしてくれてるんだからな」

美空はまだ少し、何か言いたそうにしていたが、そのうち、あきらめたように床に座り込んで目を閉じた。その周囲に全員が腰を下ろす。何も出来ないのはわかっているが、過ぎていく時間を皆、もどかしく感じていた。なんとか気持ちを落ち着かせようとすればするほど、落ち着かなくなってくる。そんな重苦しさが限界に近づいた頃、突然、全員が軽い目眩のような感覚に襲われた。別の言い方をすれば、落下するような感覚である。

「何？これ」

「今、揺れた？」

美空とサラが叫ぶ。

「いや、重力が変化してみたみたいだ。どうやら補助重力が消えたみたいだな。本来の月の重力に戻ってるぞ」

フランクが言う。確かに、体がかなり軽くなっている。

「何が起きたの？」

「これは、システムの異常かもしれない。状況は思ったより深刻みたいだな」

美由紀と健太。

「重力制御がおかしくなるってことは、環境制御システムに何か深刻な問題が起きたのかも
しれないですね」

フランクが健太を見て言う。

「つまり、救援も難しくなってる・・・ってことなのかな」

アンリが不安そうに言う。

「もし、環境制御システムに何かあったとすれば、洞窟内だけじゃなくて、ここの施設全体
に影響があるだろうから、たしかに救援どころじゃないかもしれないな」

フランクが言う。

「つまり？」

と美空。その問いの答えは、皆がわかっている。

「そういうことよ」

サラが小声で言う。しばらく、沈黙があたりを支配する。

「だったら・・・」

美空がまた口を開く。

「だったら、ダメもとで悪あがきしようじゃないの。何もしないで、このまま最後を待つな
って私は嫌よ！」

美空が立ち上がって叫ぶ。

「落ち着け、美空。冷静に考えろ。この状況下で何をやっても、自分たちの首を絞めるだけ
だ。少しでも、時間を稼いで助けを待つのが最良の方法だとは思わないのか？」

今度はフランクが少し声を荒げた。

「理屈じゃないのよ。その時になって、何もしなかったことを後悔するくらいなら、何かや
って自滅した方が、いくらかマシだわ」

「でも、いったい何をするの？そもそも、何かできるの？」

サラも少しいらだっている。

「何か、何かできることはないの？本当じゃないわけ？私は嫌よ。こんなところで死んじやう
なんて。まだしてないことだってたくさんある。やりたいことは山ほどあるのに。どうして、
どうしてあきらめなきゃいけないの……」

美空は床に座り込むと泣き始めた。

「美空……泣かないでよ。僕だって悔しいんだ。でも、待つのが最善の策だったら、そう
するしかないと思ってる。だから……」

アンリが美空の横でそう言うのだが、美空は顔を膝にうずめて泣き止まない。皆、気持ち
同じだろう。だが、ここでヤケを起こせば、ほんの僅か残っているかもしれない可能性をも捨
ててしまうことになる。少なくとも理屈の上では、そうなのだ。みんな、ぎりぎりのところで
踏みとどまっている中で、一人が崩れれば全員がパニックになりかねない。その時、アンリが
美空の前にひざまずいて彼女の肩を両手で支えて言った。

「美空、僕はずっと君のそばにいる。何があっても……」

「僕には、それしかできないけど、でも一緒にいることはできるから」

「アンリ……」

「デイクを信じよう。僅かだけど、可能性に賭けようよ」

美空は顔を上げてアンリの目を見つめる。

「ずっと……私の？……でも、もう終わっちゃうかもしれないのに？」

「そんなことはまだわからないよ。もしそうだったとしても、最後まで一緒だから」

美空の肩を支える手に思わず力が入った。

「アンリ・・・」

このまま時間が止まったら……。たぶん二人とも心の中ではそう思っていたに違いない。



しばらく沈黙があたりを支配した、その時、

「おい、生きてるか？返事をしてくれ！」

いきなりコミュニケーターから声が聞こえてきた。

「デブか？」

「そうだ。待たせたな。今、そっちに向かっている」

「重力補正がおかしくなっているみたいだが、何があった？」

「ああ、それは俺が切った」

「なんだって？」

「実は、救援が思った以上に時間がかかりそうなのがわかったから、予備の酸素ポンベを持って行こうとしたんだが、思った以上に重くてな。それで、管理センターにたのんで、この一帯の重力を本来の月の重力に戻して貰ったってわけさ。おかげで、どうにかポンベ3本を運んでいる。あと5分くらいでそっちに行つて、まずはこれを取り付ける。ところで空気漏れはどうだ？そろそろ時間切れなんじゃないか？」

「そうだったのか。脅かしやがる。環境系が死んだのかと思つて覚悟を決めたところだよ。空気漏れの方は、とりあえず応急処置して止めたからもうしばらくは大丈夫そうだ」

「そうか、そりゃよかった。もうしばらく待つてくれ。とりあえず食い物も少し持つてきたから、宴会が出来るぞ」

沈んでいた雰囲気が一気に和んだ。これで最後と覚悟を決めていたのが夢のようである。

「まったく、デブの奴、そうならそうと先に連絡しなさいよね。。。って、あんたはいつまでそうやってんのよ！この変態っ」

そういうえば、アンリはまだ美空の肩をつかんだままである。我に返つたアンリは慌てて手を

離すと、思い切り赤面した。追い詰められていたとはいえ、自分が吐いた台詞を思い出すと、穴があったら入りたい気分になる。美空もかなりバツが悪そうだ。

「アンリ君、ナイトになった気分はどうかなあ？」

サラがすかさず冷やかす。それに先に反応したのは美空の方だ。

「ナ、ナイトなんて冗談じゃないわよ。もう、さっきのは全部なしね。なし！」

美空も真っ赤になっている。取り乱したことへの恥ずかしさもさることながら、アンリの言葉に一瞬、自分の心が動いたことを、なんとか取り繕うおうとしているようだ。

「あれ、なしでいいの？せっかく一生面倒見てもらえるチャンスだったのに？」

サラは容赦なく突っ込んでくる。

「一生って・・・それどういう意味よ。私は・・・私は・・・」

美空は必死に言葉を探している。一刀両断に否定してしまうのは簡単だが、そうしたくない気持ちはどこに残っているようだ。

「いいわ。どうしても一生私の面倒を見たいんだったら、私の下僕になりなさい！」

「げ、下僕？」

「そうよ、下僕！ なんでも私の言うことを聞くのよ」

「それってさ、奴隷とも言うんじゃない？いいじゃない。なっちゃんささいよ、この際だし」

サラは完全におもしろがっている。

「かんべんしてよ、二人とも・・・」

「アンリ、物は考えようかもしれないぞ。案外奴隷も悪くないんじゃないか？」

「フランクまで？はあ・・・まいったな」

「よし、決まり！今日からあんたは私の下僕。いいわね。あ、妙な気は起こさないでよね。あくまで下僕なんだから」

もう何でもいいから、この話は一旦終わりにしたい・・・そんな感じでアンリの下僕就任が決まってしまったようである。このポジジョンが冗談抜きで一生モノになるとは、アンリもこの時点では想像できなかったかもしれない。

それからしばらくして、ダイブが酸素ボンベを持って戻って来た。ボンベは無事取り付けられ、一同はのんびりと救援を待つことになる。

「いやあ、一時はどうなるかと思ったけど、助かったぞ、ダイブ」

「こっちも時間切れになるんじゃないかとヒヤヒヤしたけど、間に合ってよかった。救援隊もなにやら混乱しているようで、最初、連絡すらうまくつかなかったから焦ったよ。たまたま、先の待避所で予備のボンベを見つけたのはラッキーだったな。あれがなかったら、かなり際どいことになっていたかもしれない」

「俺たちも、ほとんど覚悟を決めてたよ。でもまあ、おかげでちよっと面白いイベントを見られたけどな」

「面白いイベント？」

「そうね、あれはなかなか見物だったわよ」

「なんだ、何があった？」

「ちよっと。関係ないじゃない。何もなかったわよ」

「そうだよ。あれは・・・」

ダイブは、不思議そうな顔をしている。

「その二人に聞いてみたら？」

と、サラ。

「二人？ 何かあったのか？ アンリ」

「あ、いや、その・・・」

アンリは口ごもる。それもそのはずだ、アンリとダイブの間ではかなり微妙な事態である。美空にしてもこの事態の説明は難しいだろう。ダイブはちよっといぶかしげだ。

「ところで・・・、この空気漏れの原因はなんだったんだ？」

雰囲気を感じて話を換えようとしたのだろう。いきなりフランクが聞く。

「それなんだけど、情報が混乱していて、よくわからないんだ。工事中の洞窟の崩落事故じゃないかと言う話なんだけど。管理センターはその確認に、てんやわんやらしい」

「そうなのか。でも、それじゃ救援が来るのにまだずいぶんかかりそうだな」

「ああ、少しかかるだろうな。でも、近くから応援も来るようだから、それほど長くは待たされないんじゃないかな」

実際、それほど長くはかからなかった。一時間もしない間に、救援隊が個人用エアシールドを持ってやってきて、7人は彼らの先導で地上へのシャフトまで戻ることができたのである。地上に上がってみると、ロビーは人であふれていた。それもそのはずで、シャトルは先の事故以来、点検のため運航中止になっていたから、誰もここから帰れないのである。緊急で点検が終わった機体から順次運行再開するようだが、とてもこの全員を運びきれないため、乗客の多いコペルニクス方面へは、別途、エンジン付きの大型シャトルを手配中らしい。いずれにせよ、ここですばらくまた足止めである。

「それにしても・・・」

ダイブが口を開く。

「なかなかエキサイティングな探検だったな」

「まったく、月に着いてからというもの、ロクなことが起きないのは、いったい誰のせいかしらね」

美空がダイブを見て言う。

「おいおい、俺を見て言うなよ。そりや日頃の行いに自信は無いが、そりや皆同じだろう」

「あんたと一緒にしないでくれる？」

「まあ美空もあんまり言えないと思うけど。少なくとも私じゃないわよ」

「サラ、あんたね。裏切るつもり？」

「ま、結局、全員一蓮托生なんだけどな」

「だから、一緒にするなつての！フランクはそうかもしれないけど」

「まあまあ、とりあえず無事だったんだからいいじゃないか、美空」

「下僕は黙ってなさい！」

「ん？何だ？下僕って」

事情を知らないデイブが不思議そうな顔をする。

「あ、あんたにも言うておくわ。こいつは、これから私の下僕だから。あくまで下僕だけだね」

「そ、そうなのか？アンリ」

「い、いや、その……」

「こら、何を口ごもってるのよ。はっきりそうだって言いなさいよね」

「……」

「そ、そうか。下僕……か。まあ、頑張れよ」

「頑張れよってどういう意味だよ」

「そう言う意味さ」

デイブが笑って言う。なんとなくデイブも事情は悟ったらしい。しかし、下僕なんて意味不明かつ中途半端なポジションをどう考えればいいのか。デイブにとっても悩ましいはずなのに、少なくともアンリは、その先にチャレンジする権利を得たのだろうとデイブは考えた。そして、たぶんそれが美空的には優しさなのだろうと彼は思っていた。

「君たち」

健太と美由紀がやってきた。

「色々とお世話になったね。君たちが一緒に本当によかったよ」

「ありがとうございます。もう、この人と二人だけだったらどうなってたか」

「いえ。健太さんがいなかったら結構大事なところで困ってたと思いますよ。俺たちも助かりました」

フランクがそう言うと言わずに皆がうなずいた。

「これも何かの巡り合わせかもしれませんね。この先も、色々とおつきあいさせてもらえるといいです。研究とかでお役に立てることがあったら遠慮無く言ってください」

「ありがとうございます、アンリ君。こちらこそよろしく頼むよ。君とは何か面白いことができそうだから。皆さんも、東京に来たときは声をかけてくれればあちこち案内できると思うから」

「是非、よろしくお願いします」

やがて、コペルニクス方面へのシャトル到着のアナウンスがあつて、待っていた人たちがゲート方面へ流れ出す。

「さあ、帰ろうぜ。腹も減ったし、帰ったら晩飯にしよう」

「まったく、食い意地だけは一人前なのよね。だからデブるのよ」

「ねえ、今夜は花火ないの？」

「サラ、それはやめてくれ。俺もちょっと忘れたい・・・」

「あれ、忘れちゃうんだ」

「おいサラ、それくらいにしとけよ」

サラはおもしろ半分だが、フランクが止めに入る。それから全員シャトルに搭乗。間もなくマリウスポートを離陸したシャトルは、あつという間にコペルニクス宇宙港に到着した。この大型シャトルはウエスト・リムには降りられない。最初に到着した時と同じように彼らはルナトレインをウエスト・リムまで乗り継ぎ、ホテルへと帰ったのである。



それからの数日は何事も無く、というか、ここまでの騒ぎに比べれば多少のドタバタなど些細なことのように思えるわけで、コペルニクス外輪山一周ツアーや静かの海のアポロ11号記念館巡りなど、とりあえず楽しく過ごした5人だった。もちろん、アンリは下僕として、さんさんこき使われて悲鳴を上げ続けていたのだけれど、それはそれで平和な時間だったと言いきだらう。

そして、あつという間に最終日。朝食後にホテルをチェックアウトした5人は、車でウエスト・リム駅へ向かう。地上部分の道路の周囲には、夜の月の景色。意外にも明るく感じるのは、ほぼ満ちた地球が空を照らしているからである。

「あーあ、もうお終いかあ。あつという間だったわね」

サラが空を見上げてつぶやく。

「楽しい時間は過ぎるのが速いって言うけど、本当よね」

美空は地球光で照らされた周囲の幻想的な景色をずっと見ている。

「そうだな。でも、誰かさんは長かったんじゃないのか？」

フランクがにやりと笑うとアンリの方を見る。

「はぁ……。確かにね」

アンリは、なんとなくお疲れ気味だ。ようやく帰れる、そんな雰囲気を漂わせている。

「仕方ないな。ご主人様のご主人様だからな」

デイブもそう言うのとアンリを見て笑う。

「なんか文句でもあるの？」

「あ、そんな訳じゃ……」

聞きつけた美空がアンリを見て言う。ここ数日は、すっかりこんな感じで、アンリも下僕モードが板についてきたようだ。

「お手柔らかに頼むよ、美空」

「それは、あんたの行い次第だから」

帰ったら新学期。附属高3年生は、アカデミー本課に進む準備もあって、何かと忙しい。これから一年、アンリがどんな状況に陥るかは、当人を含め想像に難くないのである。

やがて、車はまた地下に入って、間もなくウエスト・リム駅に到着する。

「そういえば、健太さんたちはもう帰っちゃったのかな」

「うん、春休みのうちにやっておきたい実験があるからって、昨日帰ったみたいだよ」

「なんかいい感じの二人だったわね」

「ああ、お似合いのカップルって感じだったな」

「アンリは連絡先を聞いているんだよな。またどこかで会えたらいいけど」

「美空は帰省したら会えるんじゃないの？」

「そうね。でも、あんまり家に帰る気もしないんだけどね。親がうるさいから」

「そう言うなよ。そのうち美空の家庭訪問をかねて、みんなで東京へ行ってみようぜ」

「あんたね。3年になったらそんな暇はないわよ」

「本課進級試験が終わった後で、卒業旅行ってのはありかもね」

「サラ、余計なことを言わないでよ。こいつら、本当に来そうだし」

「いいじゃないか。俺たちも一度東京には行ってみたいしな」

「あのさ。そろそろルナトレインが出る時間だけど・・・」

「うわ、ぎりぎりじゃない。あんたもっと早く言いなさいよね。気が利かないんだから・・・行くわよ。乗り遅れたら帰りの便に間に合わないし」

そんな感じで5人はホームへと走るのだった。



コペルニクス宇宙港を後に、5人を乗せたシャトルは一気に高度を上げていく。たった一週間だが、見慣れた灰色の景色が、どんどん遠ざかり、丸みを帯びた月の輪郭が窓から見えてくる。高度を上げるにつれ、月の輪郭が輝きを増し、やがて、シャトルは太陽の下に飛び出した。そして月の裏側を半周してからさらに加速して月軌道を離れる。あとは、途中のルナ・ステーションで加速されてから、地球の向こう側、150万KMのところにあるL2ステーションまでひとつ飛びだ。なにやら波乱の春休みだったが、5人はそれぞれに、なにかしら自分の変化らしきものを感じていた。この一週間の本当の意味を彼らが知るのはずと後のことだが、そこまでの話はまた機会があったらすることにして、このエピソードを締めくくろう。

では、またそのうちに・・・。